

鳴門教育大学 教職大学院の学びを生かす

現在、将来にわたり、求められる教員像を探求しつつ、教育成果の検証を重ねながら、専門職業人としての教員を養成すること。それが鳴門教育大学・教職大学院のミッションです。

人と人とのつながり

「鳴門教育大学教職大学院では、多くの人と、積極的に関わり、多くの人に支えられてきた。大学教員、才気あふれる同期の仲間、実習校の子どもたちや同僚。そうした人と人とのつながりの体験こそが、教職大学院で学んだことの中で最も価値のあることではないだろうか。人とつながっていくための拠所は、これから先もずっと大切にしていきたい」これは、金森さんが、最終成果報告書に書いた文章です。



金森二枝先生

学校臨床実践コース 平成23年3月修了

CASE 5: 人との「つながり」



教職大学院では、既設の修士課程の授業も学ぶ機会が得られ、歌唱指導、絵本の読み聞かせなどの講義を受けることができました。この体験が、実習校での歌唱指導や学校、児童養護施設での絵本の読み聞かせにつながっていきました。常に、アンテナを張り巡らせ、できる喜びや、学ぶ楽しさを味わうことのできる「学ぶ立場」にあり続けることは、教師にとって大切なことだと思われています。

鳴門教育大学教職大学院修了後、「人と人とのつながり」と「できる喜び、学ぶ楽しさ」を学校の子どもたちにも伝えてきた金森さんは、平成25年度徳島県小学校家庭教育研究大会で提案発表をすることになりました。

主題は、「家族や近隣とのつながりを大切にする子どもの育成～わたしたちができる 絆プロジェクト～」まさに、教職大学院での学びの実践です。



家族とのつながり一心の居場所一

金森さんは研究の動機を次のように話します。

「6年生に進級したばかりの児童は、家庭生活に対する自覚はさほどありませんでした。『家族とのつながり』を意識して生活するための手立ての必要性を感じました。人は一人で生きているのではなく、支え合って生きています。これから多くの出会いを経験し、成長していく子どもたちにとって、家族とのかかわりは礎となります。6年生の家庭科の授業を通して、一番身近な家族を大切にできる人になってほしいと思いました」

教職大学院時代に「学校における居場所作り」の研究に取り組んだ金森さんは、「家庭とは、安心安全を感じられ

る場所、ありのままの自分が受け入れられていると感じられる場所であり、家族とのつながりによるところが大きい最も重要な居場所である」と考えています。

このことが、家族の一員として、生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てるの必要性を強く感じ、この実践研究に取り組もうとした理由の一つでもあるのです。

心と学習をつなぐ授業改善

教職大学院で学んだ実践的研究方法であるアクションリサーチが、児童の学習活動にも生かされています(研究概要参照)。そして、一つ一つの学習活動に、学校臨床心理学で学んだ「関わりの専門家」としての教師の知恵が流れています。

金森先生の研究概要

家庭生

Research

身の回りのよごれを調べてみよう

課題を見つけ自主的に解決できるように、自分たちが生活する学校のよごれ調べからスタートした。

セロハンテープ、布、ルーペ、ほうき、デジタルカメラなどを使用し、教室、廊下、手洗い場、昇降口、家庭科室のよごれをグループごとに調べた。

調査結果は、ワークシートに付箋を用いて書き込んだ。

Plan

よごれをきれいにする方法を考えてみよう

学校ピカピカ大作戦の計画を立てることにした。

よごれをきれいにする方法をグループで話し合った。自分たちで、掃除の仕方を確認するだけでなく、家族や周りの人に掃除の仕方の聞き取りを行った。

持ち寄った方法を学級全体で発表し合い、掃除場所ごとにまとめ、掲示した。

Do

学校ピカピカ大作戦を実行しよう

場所やよごれに合った掃除道具を自分たちで作った。

新聞紙や割り箸で作った掃除用具を使って、学校をきれいにすることができて、達成感や満足感を味わった。



だから 鳴教



『きれいにしようピカピカ大作戦』では、P(プラン)において家庭に伝わる整理整頓や掃除の知恵、技術を継承できるように努めました。両親や祖父母から聞き取った「みかんの皮やジャガイモの皮を使う」「重曹は環境にやさしい」等の知恵はクラス中に広がりました。家族に質問することで、ひと手間かけてつながりを作ることを児童は自然に学んでゆきました。

C(チェック)の実践発表会では、友達の意見を否定せずに受け止め、良い点や参考になったことを具体的に伝えるようにしました。お互いの良さを認め合う学級づくりするために、心に寄り添う支援を続けています。

いつもスマイル

そんな金森さんも校務の多忙さに笑顔を失いかけることがあります。そんなとき、かつて担任した子どもが自分を評して送ってくれた「いつもスマイル」を思い出します。この言葉は、金森さんの教育のモットーであり、教師としての矜持でもあります。

「多くの方が、キャンパスの豊かな自然やゆったりと流れる時間の中で、初心に戻って、教師としての自分を見つめ直すためにぜひ鳴門教育大学教職大学院で学んでほしいと思います」締めくくりも笑顔の金森さんでした。

「教職実践力」を高める授業

鳴門教育大学教職大学院が目指すものは、学校や地域で指導力を発揮できるリーダー教員と実践的対応力に優れた新任教員の養成です。

設置コースは、現職教員のために領域枠を取り払った「教職実践力高度化コース」と学部卒生のための「教員養成特別コース」の2コースです。

カリキュラムは3つの力からなる教職実践力を高める授業科目で構成されています。その3つの力とは、

- ①教育実践力：経験知や実践知とともに幅広い専門的知識や技能を活用して多様な教育課題に対応できる力
- ②自己教育力：実践の省察をふまえ、自主的・継続的に学び続けることのできる力
- ③教職協働力：自己だけでなく、教職員と協働して、学校組織における教育活動を活性化させる力です。

学び合いで培うコミュニケーション能力

現職教員と学部卒生とが共同で学ぶ授業が多いのも特徴の一つです。現職教員が、自らの経験を伝え、考えを述べることは指導だけでなく、省察にもつながります。

活と家族を基盤とし、家族や近隣の人とのつながりを深める実践研究～きれいにしよう ピカピカ大作戦～

Check

学校ピカピカ大作戦のまとめをしよう

グループで順番に、実践発表をした。友達の見解の中でよい点や参考になったことを伝えあう場とした。

活発な意見交換の場となり、清掃に対する関心・意欲が高まった。

Action

わが家のピカピカ大作戦を実行しよう

家庭でもよごれが気になるところをみつけてピカピカ大作戦を実践し、チャレンジカードに記録した。

保護者からは「また、してほしい」「次は、ここもお願いしたい」と好評であった。

Conclusion

実践報告会をしよう

実践報告会では、友達も進んで家庭の清掃を実践していることを知った。

学校での清掃や片づけが自然にできる子どもたちが増えてきた。

家庭からも子どもの変容に対する感謝の声が届いている。



「あの先生がいないと困る！」

そんな頼もしい先生だからこそ**鳴教の教職大学院**へ

教師力UP

頼れる、頼られる先生は、誰も高い自己研鑽への意欲を持っているものです。その意欲に応えて、より高い“教師力”を身に付けてもらうことをめざすなら、研究と実践のバランスと融合が特長の教職大学院が最適です。

学校力UP

指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次には勤務校の学校課題アセスメントを2年次には勤務校でのフィールドワークを通じて課題解決を目指します。在学中も、勤務校にとって、大きなサポートが得られるのです。

地域力UP

教職大学院がめざすのは、リーダー教員の育成です。勤務校はもとより、地域の教育界に資することのできる力が身に付くことでしょう。教育の明日を担える人材の育成には、ぜひ教職大学院をご活用ください。

学び続ける教員を支援するための連携



北島町教育委員会では、グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化において、それに対応できる実践的な指導力を持ち、意欲的な教職生活を続ける教員を育成するために、学校、大学、教育委員会が共に協力し合って取り組む体制を整えています。

このような連携のもとで、鳴門教育大学教職大学院の修了生である金森さんは、家庭科における授業スタイルや教育方法を改善し、「家

北島町教育委員会 教育長 北島 孝昭

族や近隣とのつながりを大切にする子どもの育成」を目指した実践を展開しました。金森さんの活動は「人と人とのつながり」と「できる喜び、学ぶ楽しさ」という教職大学院での学びを、子どもたちの生活に組み込んだ事例といえるでしょう。

今後も、鳴門教育大学教職大学院との連携を通して、学び続ける教員を支援してゆきたいと思っています。

教職大学院の学びを活かした魅力ある学校づくり



学校と家庭が相互に良好な関係を作ることは、魅力ある学校づくりにつながります。そのカギとなるのは、成長する子どもたちの姿が保護者に伝わることです。

今回の研究では、家庭生活の中から課題を見つけ、学習に取り組み、家庭での実践につなげることができるように工夫しました。学校で学んだ調理実習や清掃、整理整頓、ミシン縫い等は、家族への朝食作り、わが家のピカピカ

北島小学校 校長 川西 隆夫

大作戦、家族へのクッション・エプロン作りへと発展しました。子どもたちの成長する姿は保護者に届き、学校との関係づくりにつながっています。

鳴門教育大学教職大学院で学んだ「人と人とのつながり」を大切にする金森さんらしい取り組みです。

◆お問い合わせ

鳴門教育大学 教職大学院コラボレーションオフィス

電話：088-687-6598 ファクシミリ：088-687-6694 E-Mail：collabo@naruto-u.ac.jp

鳴門教育大学ホームページ <http://www.naruto-u.ac.jp/>

Recurrent Education

授業実践カリキュラム 開発コース



課題解決に生かす

猪石 光久さん
[松山市立 城西中学校]

私は、1期生として教職大学院に入学しました。鳴門教育大学院修了の先輩から教職大学院を勧められたことが入学を決意した理由ですが、教職大学院説明会で、目的が「学校・学級運営や生徒指導、授業実践に関する高度で専門的な知識や技術の習得」であること、「置籍校の教育活動や学校運営の課題解決」であることを聞き、魅力を感じたからです。

在学中は、置籍校と隣接する小学校との小中連携に取り組みました。理科の小中交流授業や小中授業交流研修会を通して、中1ギャップの解消や小・中学校教員の協働関係構築にある程度の成果が上がりました。このことは、コースの枠を超えて指導してくださった先生方、課題分析・解決実習を受け入れてくださった両校の校長先生をはじめ多くの先生方の理解と協力のおかげであると感謝しています。

大学院修了後、置籍校で2年間勤務し、国立教育政策研究所より研究委託を受けた「魅力ある学校づくり調査研究事業」の研究推進者として、不登校の未然防止に向けた実践研究に取り組みました。わかる授業づくりや9年間を見通した学習指導・生徒指導の仕組みづくりにより得られた成果は、教職大学院での実践研究がベースになったと考えています。

現在勤務している学校が抱える課題は前任校と違いますが、教職大学院で学んだ実践力や分析力、マネジメント力などを課題解決に生かすよう努めています。

(平成22年3月修了)

学校学級経営コース



学校課題を 解決する教頭職

田中 義人さん
[高松市立 一宮小学校]

私は、教職大学院を修了後主幹教諭として勤務することになりました。

香川県の主幹教諭には、学校の課題を解決するファシリテーターとなるのが求められています。当時私の勤務した小学校では、不登校児童への対応が課題であったために、チームを組織してその対応にあたりました。また、勤務3年目には、防災・防犯・交通安全に関して、家庭・地域と連携して「子どもの生命をみんなで守る」組織を立ち上げ、『ぼうさい甲子園』でも表彰していただいたところです。

教職大学院での幅広い学びは、勤務校での様々な教育課題に対応するのに役立っています。また、主幹教諭という立場からのマネジメントという点でも、学びが生かされました。さらに、大学院時代の恩師には、修了後も勤務校での実践について報告し、専門的な立場から示唆いただいているところです。

修了4年目からは、新たな勤務校で教頭職を拝命し、学校経営の要としての活躍を求められています。「新米教頭」ですが、学校課題を解決すべく、実践を支える理論を学びながら職責を果たしていきたいと考えています。

(平成22年3月修了)

学校臨床実践コース



職業人生の転機

松木 伸介さん
[高知県立 中央児童相談所]

現場教師一筋であった私にとって、教職大学院への入学は、私の職業人生の転機となりました。教職大学院修了後は、県教育委員会を経て現在、中央児童相談所で勤務しています。

大学院在学中は、自己を振り返る機会となり、教師としての驕りや経験知・実践知に偏っていた自分に気付くことや互いに刺激し合う人生の友を得ることができました。今、在学中の学びや先生方とのつながりが、仕事の大きな支えになっていると感じています。

教育委員会での施策作りは、経験知・実践知と理論知の融合を図る枠組み作りと言え、まさに教職大学院が求めていることでした。教員研修の講師や施策のアドバイザーに佐古先生、阪根先生、村川先生、久我先生、粟飯原先生、佐藤先生等をお招きし、多くの学びを継続的にいただきました。

中央児童相談所では、愛着形成、依存と自立、カウンセリングマインド等の学び直しの最中で、児童福祉司の資格取得のために通信教育に悪戦苦闘しています。人生思うようにいきませんが、課題に向き合い楽しんで、学び続けていきたいと思っております。

(平成23年3月修了)

～学び続ける修了生～

授業実践カリキュラム 開発コース



汎用性のある学び

筒井 泰登さん

【佐賀大学文化教育学部附属小学校】

鳴門教育大学では「教師のカリキュラムマネジメント力育成」について学びました。教職大学院修了後は離島の中学校に戻り、総合的な学習の時間の単元づくりや全校（小中合同）でのスピーチタイムづくりに取り組みました。ワークショップを用いて教師のアイデアや得意分野を生かすシステムをつくりました。その結果、総合学習では、校長先生も授業をしてくださり、生徒のホームページによる成果発表に至りました。スピーチタイムでは、聞き手に効果的に聞かせる方法に全職員が取り組み、小学1年生から中学3年生までが真剣に聞く姿が見られました。総合学習で生徒が「やっぱり島が好き。島のためにできることを増やしたい」と自分の課題に気付き改善しようとする態度が見られたことは、教師のカリキュラムマネジメント力の証だと思います。

現在は、佐賀大附属小に赴任し、新たな教育活動に取り組んでいます。中学校から小学校へと学校は変わっても私の根底には鳴門教育大学での学びがあります。汎用性のある鳴門教育大学での学びを生かして附属の研究に取り組んでいこうと思っています。

（平成23年3月修了）

学校臨床実践コース



鳴門での学びを行政に

服部 直美さん

【鈴鹿市教育委員会事務局指導課】

院での学びを終え、現職場に赴任しました。行政という場で自分にできることはあるのだろうかという不安からのスタート、多岐に渡る仕事内容に驚き、慣れない業務に戸惑うものの、市教委の仲間や現場の先生方からの温かい励ましにより、現在に至っています。

小学校、中学校で提案授業を参観し、検討会等で討議に参加する時、授業改善において、大学院で学んだ特に2つのことがいかに重要であるかを実感しています。学習指導要領や生徒指導提要に示されている目標や目指す方向性を理解すること、そして何より子どもに寄り添い、学校や子どもたちの良さや課題といった実態を把握することです。今は、それらから子どもたちにつけたい力を明確にし、その力をつけるためには環境をどう整え、授業を組み立てていけばよいかを現場の先生方と共に考えています。

その際には、大学院で研究した「ユニバーサルデザインの視点」を取り入れた授業実践を目指しています。

先生方が子どもたちの学力保障に向けて、真剣に授業改善や環境づくりに取り組む姿に元気をもらって、私自身も学びを怠ることなく、指導主事として精進していきたいという思いを強くする毎日です。

（平成24年3月修了）

学校学級経営コース



学びを伝える

鈴木 孝志さん

【静岡県立 浜松城北工業高等学校】

教職大学院を修了して、まず思ったことは「この教職大学院での学びを多くの先生方に伝えなくてはならない」ということでした。

新年度になり、新たな学校への異動となりましたが、まずは、教職大学院での学びをできる限り、置籍校で実践してみようと思いました。学校課題フィールドワークで同僚の先生方に実践をお願いした「授業振り返りシート」を自分の担当している授業で実践することにしました。この実践を継続したところ、教職大学院で学んだ効果に加えて生徒の信頼関係構築には最適なツールであるという新たな発見がありました。

また、全ての県立学校の代表者が参加する平成25年度教育課程研修集会・総則部会で、教職大学院での実践について発表する機会を頂きました。学校改善のための組織論と指導論を踏まえた実践について説明し、参加した先生方に理解を深めてもらいました。

現在では、置籍校でも前任校と同様の教育課題をかかえていることがわかり、教職大学院で学んだことを同僚の先生方に説明し、できることから教職員全体へ広がっています。そしてこの実践の輪をより多くの学校へと広げていきたいと思っています。

（平成25年3月修了）